

土偶装飾付土器と顔面装飾の付く土器

—中部・関東地方の中期前半土器—

中山 真治（府中市ふるさと文化財課）

1 土偶装飾付土器と顔面装飾付土器

日本列島中央部の中部～関東地方西南部を中心とする縄文中期前半の土器には、顔面（人面）装飾（いわゆる顔面把手）の付けられた土器や土偶装飾の付けられた土器が盛行した。これらの意匠は勝坂（井戸尻）文化を最も象徴する特徴的な要素として注目されてきた。その多くが芸術的作品としても評価されることから、国指定あるいは地域の指定文化財となっているものも少なくなく、昨今日本の縄文文化の代表的な遺物として展覧会を飾ることも珍しくない。また顔面装飾付土器は、その特異性により土偶とともにこれまで解釈論が活発に論議されてきた。本稿では勝坂（井戸尻）文化にみられる顔面装飾の表象された土器の分類の大綱とその概要について以下に整理した。

2 黒駒型土偶装飾付土器（第2図）

有名な東京国立博物館蔵の山梨県黒駒中丸遺跡の土偶と同様の意匠を器面に貼付した土器。多くは円筒形の深鉢の上半部に土偶様の意匠が隆起体で貼付されるが、口縁の突起として表象される土偶頭部の顔面の多くは簡略化される。黒駒土偶の意匠は刺突文を有するハの字状の肩パットと、その直下に中軸線を刻み分離して貼付される胴・臀部がいずれの個体も規範に沿って作られる。八ヶ岳山麓から甲府盆地周辺を経て東は多摩丘陵中部付近まで分布する。時期的には勝坂式の古期（猪沢～藤内期）にみられるが「藤内神像筒形土器」以降、井戸尻期には消滅する。このタイプでは日常使用される土器と土偶祭祀・儀礼が不可分であった可能性を示唆する遺物の一つである。

3 顔面把手（装飾）付土器（第3図）

顔面把手（がんめんとって）という用語は、明治37年に長野県諏訪郡北山村（現茅野市）湯川で発見された資料を江見水陰が『地中の秘密』で紹介したのがはじまりとされる。翌明治43年には山梨県北巨摩郡穂坂村（現韮崎市）小学校敷地から優品が発見されるなど当該土器が学会で注目されるようになった。その後、今日では勝坂（井戸尻）文化後半期を最も代表する土器で長野（中南信）、山梨、東京（多摩）、神奈川県内の1都3県を中心に分布することが知られるようになった。器形は屈折底となるキャリパー形深鉢の1箇所大型把手が付けられる形態を基本形とするが、山梨県を中心に4単位の大型把手を有するいわゆる「多喜窪タイプ」に付けられたものも存在する。また中部地方の八ヶ岳山麓以西では樽形の器形も目立つ。このタイプには大日野原例を典型とする土偶装飾＝「ポーズ土偶」を口縁上に載せた土偶装飾付土器もみられるが個体数は非常に少ない（吉本・渡辺1994）。勝坂式後半の井戸尻期の顔面装飾には深鉢の大型把手として発達した定型的な優品がみられる。顔面そのものの大型化、中空のつくり、鋸歯状（蛇体）文、1対の耳飾様装飾、ハート形の眉形、釣目など、構成の斉一性から研究の端緒から「縄文の女神像」を表象したものとして理解されているが、それは土偶から派生したことは間違いない。盛行期の口縁の顔面把手には、直下の環状把手や「出産文」、三本指の腕との一体化したものが少なくなく、蛇体状把手と対になる例もみられる。顔面については内向きのものが圧倒的に多く、目・鼻・口の表現のないもの、片目（隻眼）のもの、目が中空になっていないものなど個体によるバリエーションもあるが地域性は目立たない。なお顔面把手の報告例は601点と多いが（吉本・渡辺1999）、完形・復元個体は約50個体と多くはない。顔面把手の顔について、かつて鳥居龍蔵はこれを土偶とともに「女神式意匠」と呼び、顔面把手付土器は宗教上の儀式で用いた特殊な女神信仰とされ（鳥居1922）、近年では吉田が土偶と同様「神聖な女神像」であるとし、ハイヌウェレ型神話の女神との関係で解釈している（吉田1992）。吉本・渡辺もその顔は成人女性で、「性的結合によって生じる新しい命としての食べ物を神と共に食べた宗教的な行事を示唆した」という解釈を

披露している（吉本・渡辺1994）。

4 人体（土偶）装飾付有孔罎付土器（第4図）

勝坂（井戸尻）文化を特徴付ける土器の一つに有孔罎付土器がある。多くは樽形、壺形を呈する器形で、量量も大小あり、器面内外に赤・黒色の塗彩が施されるが、その用途・機能には酒造具説、太鼓説をはじめ諸説あって今日でも結論が出ていない機種の一つである。有孔罎付土器そのものは猪沢期以降みられるが、人体装飾が盛行するのは勝坂式の後半（藤内～井戸尻期）に限定されている。勝坂式後半の当該土器には無文のものもあるが、有文のものでは人体（土偶）装飾が付き、三本指の腕など不可解な文様の付けられる事例が圧倒的に多い。三本指をもつ腕の意匠では、本来ある腕に1対の腕が追加された「2組4本の腕」（瀬口2013）として象徴的に表現される。

なお、有孔罎付土器ではない「パネル文（縦区画文）土器」の深鉢に人体文が描かれたものも一定数存在する。

5 釣手土器

いわゆる釣手土器は、今日燈火具（ランプ）として理解されているが、上記の他の器種に比しても製作された個体数は多くない。釣手部に人体装飾のないもの、あるいはイノシシなどの獣面の意匠をもつものもあるが、顔面把手同様に蛇体装飾との関連も強い。人体装飾をもつ特に背高の大型の優品は長野県など中部高地方面に多い。釣手土器は勝坂末（井戸尻式期）に増加し、次の中期後半の曾利I式期にかけてみられる。釣手の形態は顔面把手から派生したという考えもある（中村2013など）。この釣手土器の特異性は、先のハイヌウェレ型神話や女神の身体から火が発生したとする火の起源神話などと結び付けられて論じられることも多い。

6 まとめ

顔面装飾付土器は東日本の縄文文化を特徴付ける遺物の一つであるが、とりわけ中部～関東地方西南部の勝坂（井戸尻）文化の土偶・顔面装飾は当該地域に発達した有脚立像土偶との関係が緊密であることをうかがわせる。顔面装飾は中期前半の猪沢期からみられるが、藤内II期～井戸尻には大型の定型化した顔面把手の付く深鉢が発達する。点数は少ないが同時期の特殊な器種である有孔罎付土器の体部にもそれは表象されるが、こちらは土偶本来の意匠を体現する。土器への顔面装飾は井戸尻期後半以降、釣手土器のみに継承されていくが程なく消滅する（第1図）。

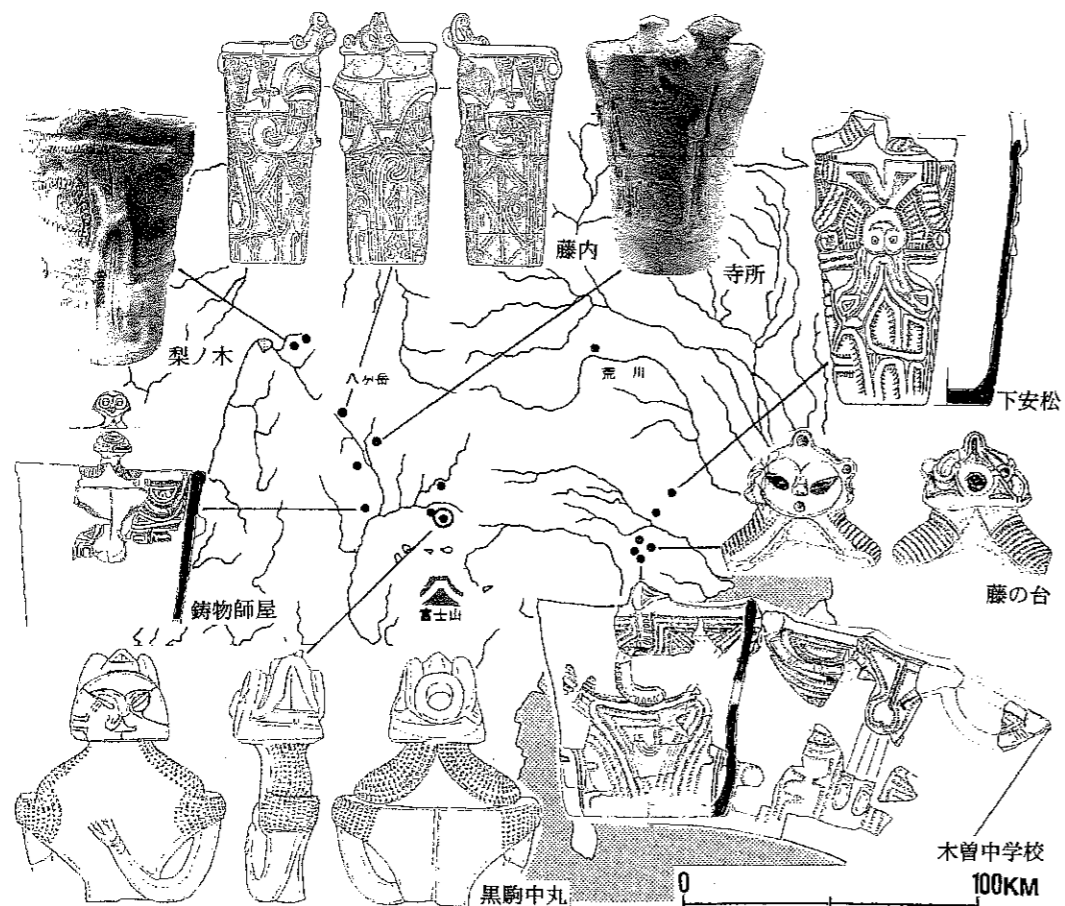
主要参考文献

- 瀬口眞司 2013「土偶とは何か—図像に残された意図から用途と役割を探る—」『紀要』第26号 公益財団法人滋賀県文化財保護協会
- 小松 学 2008「顔面把手」『総覧縄文土器』
- 鳥居龍蔵 1922「日本石器時代民衆の女神信仰」『東京人類学雑誌』
- 中村耕作 2013『縄文土器の儀礼利用と象徴操作』
- 中村日出男 1970「顔面把手1」『郵政考古』第1号
- 中村日出男 1972「顔面把手2」『郵政考古』第2号
- 中村日出男 1973「顔面把手3」『郵政考古』第3号
- 中村日出男 1976「顔面把手4」『郵政考古』第4号
- 中村日出男 1979「顔面把手5」『郵政考古』第6号
- 中村日出男 1981「顔面把手6」『郵政考古』第7号
- 中山真治 2000「顔面把手付土器小考—勝坂式後半の顔面装飾付土器について—」『東京考古』第18号
- 中山真治 2015「顔面装飾付土器小考2—勝坂式の土偶装飾付土器と顔面装飾の付く土器について—」『東京考古』第33号
- 藤森栄一 1968「顔面把手付土器論」『文化財』第10号（『縄文農耕』1970所収）
- 山梨県立考古博物館 2004『縄文の女神』（展示図録）
- 吉田敦彦 1992『昔話の考古学 山姥と縄文の女神』
- 吉本洋子・渡辺誠 1994「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究」『日本考古学』第1号
- 吉本洋子・渡辺誠 1999「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究（追補）」『日本考古学』第8号

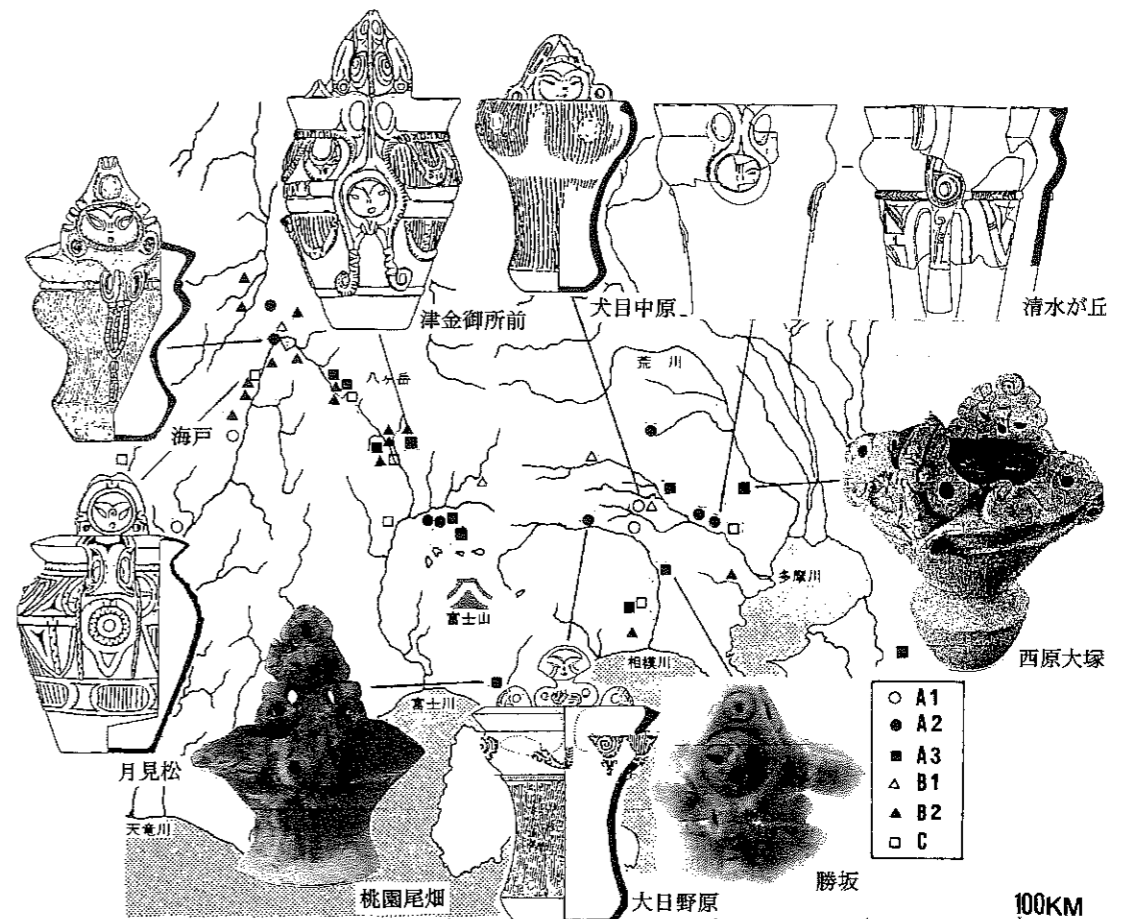


時期	5期	6期	7期	8期	9期	10期
器形	貉沢期	新道期	藤内I期	藤内II期	井戸尻I~III期	曾利I期
深鉢形1 (円筒形)	黒駒型土偶裝飾付土器		——?—— 藤内神像筒形土器			
深鉢形2 (キャリパー形)	顔面裝飾付土器		? 最盛期の顔面裝飾付土器		(いわゆる顔面把手) 大日野原型土偶裝飾付土器 (ポーズ(目切型)土偶裝飾)	
有孔鏝付土器 (樽形)			人体(土偶)裝飾			
釣手土器					人面裝飾付土器	

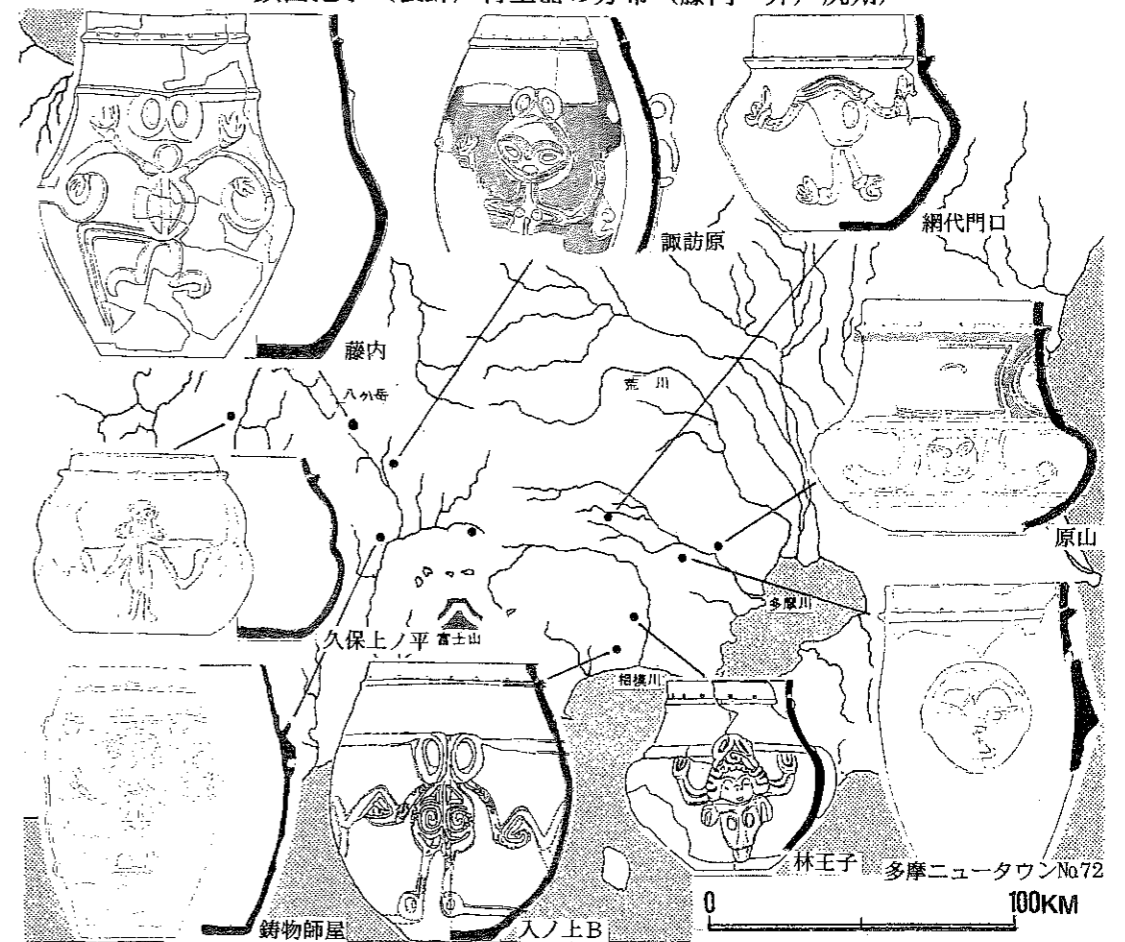
第1図 中部・関東地方縄文中期前半の人体(土偶)裝飾付土器の変遷



第2図 黒駒型土偶裝飾付土器の分布(貉沢~藤内期)



第3図 顔面把手(裝飾)付土器の分布(藤内~井戸尻期)



第4図 人体(土偶)裝飾付有孔鏝付土器の分布(藤内~井戸尻期)